

# 2023年度事業報告

公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)は、2011年に公益財団法人に移行して以来、国内外の「児童及び青少年を対象とした外国語教育及び多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業を行い、もって児童及び青少年の相互理解と人間形成を図り、新たな国際社会の発展に寄与する」(定款第2章第3条)ことを目的として事業を推進してきました。

その後、社会の多様化が急速に進むなかで、言語や文化に注目しているだけでは現実に対応しきれないのではないかという認識のもと、昨年度新たなビジョンとして「多様な背景をもつ人たちとともに、すべての人がより自由により対等に生きられる世界を創り、未来につないでいく」ことを掲げました。さらにビジョンの実現に向けて、「対話から共通理解へ」、「協働から共創へ」、「対等な関係性の構築」の三つをミッションとして定めています。2023年度は、社会の変化を視野に入れながら、若い世代が希望をもって生きていくための後押しとなるような事業と組織の構築に向けてスタートを切った1年となりました。

## 2023年度の事業一覧

【公1】我が国と諸外国の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業

ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

1. [学校のソトでうでだめし] テンダーさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座
2. 地球講座 2023 「The LIVE」、「The CORE」
3. アの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発・提供事業

1. ときめき取材記ウェブサイトの運営
2. イの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

ウ. 多様な言語や文化の背景をもつ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業

1. 多言語・多文化パフォーマンス合宿 ひろしま PCAMP
2. 新たな表現を探るオンライン交流プログラム みんなで Collaboard !
3. ウの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

エ. 広報事業

1. 財団の広報
2. デジタル媒体を使った広報のサポート
3. エの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

オ. 助成事業

1. 公募助成金プログラム

【公1】

我が国と諸外国の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業

予算額 107,869,113 円／実績額 99,066,504 円／収支差額 8,802,609 円

内、公益目的事業共通費用(給料手当、福利厚生費、消耗品費、賃借料など)

予算額 77,971,060 円／実績額 78,218,176 円／収支差額 Δ247,116 円

ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

【予算額 11,250,682 円／実績額 7,729,386 円／収支差額 3,521,296 円】

事業名	[学校のソトでうでだめし] テnderさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座								
経費	予算額	5,046,060 円		執行額	2,736,813 円		差額	2,309,247 円	
収益	予算額	参加費	90,000 円	入金額	参加費	14,000 円	差額	参加費	Δ76,000 円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由	<p>1. 経費について</p> <p>1) 講座開催形態の変更に伴う事由 当初はオンラインでの中高生・一般向け講座を予定していたが、英国ヨーク大学と共催したオンライン講座以外は、すべて対面での授業、ワークショップに変更した。それに伴い、オンライン講座の運営をサポートする臨時雇人および配信時の動画撮影者への謝金が発生しなかった。また、オンライン講座向けに新規の企画・構成を講師に依頼する予定で謝金を計上していたが、対面の5回は以前オンラインで実施した内容をアレンジして実施したため、謝金が計画より少ない金額となった(なお、対面での5講座・ワークショップの謝礼は、講師個人ではなく講師が所属する一般社団法人に支払ったため、当初計画していた謝金ではなく、委託費として計上した)。</p> <p>2) オンライン講座の全体報告書の発行方法変更等に伴う事由 2021年2月～2023年3月に実施したオンライン講座の報告書を2024年度に印刷物で発行することを計画し、2023年度はそのための企画協力・編集謝金を計上していた。しかし、すでにウェブに掲載している各回講座のレポートを活用するため、またより多くの人たちに読んでもらうために、ウェブ上で報告書を作成・公開することにした。それに伴い、印刷物を想定した企画協力・編集謝金が発生しなかった。また、本報告書用に講師に執筆を依頼していた原稿の執筆が2024年度に繰り越されたため、執筆謝金が発生しなかった。</p> <p>2. 収益について 「火熾ストーブを作ろう!」を除くプログラムは、学校の授業、地方自治体主催の教育イベント等として実施したため、参加費が発生しなかった。</p>								

2023 年度の事業	<p><b>&lt;事業の目的&gt;</b>  多様な生き方や価値観が尊重され、人びとの対等性が重視される社会の実現に向けて、当事者として行動する人、自分で新しい選択肢や解決案をつくり出す人が増えていくことをめざす。</p>
	<p><b>&lt;2023 年度の目標&gt;</b></p> <p>1. レポートおよび報告書の作成  2021 年 2 月から 2023 年 3 月まで実施したオンライン講座で扱った内容と、その背景にあるものの見方・考え方が、多くの人に共有され、役立つものとして残るよう、各回のレポートや全体の報告書の作成作業を行う。</p> <p>2. 講座の実施  オンライン講座シリーズで扱った考え方がより多くの人たちに共有され、受け渡された技術や視点を応用して行動する人が増えることをめざし、いくつかのテーマをピックアップしてオンラインでの講座を実施する(連続シリーズではなく、単発の講座を複数回実施)。2024 年度以降、対面でのプログラムにつなげていくことも視野に入れて準備する。</p>
	<p><b>&lt;実施内容&gt;</b></p> <p>1. オンライン講座シリーズの各回ウェブレポートおよび全体報告書の作成  2022 年度中に実施した 5 講座のうち、「第 9 回鉄工を身につけて強力なストーブを作ろう」、「第 11 回 交渉を学び、こころざしを護る」、「第 12 回生き物の輪に戻るためにドライイレを作ろう」の 3 講座のウェブレポート(いずれも前・後編の 2 部構成)を作成・公開した。残りの 2 講座「第 10 回 きみのためのエネルギー。実用パラボラソーラークッカーを作って太陽熱で調理する」「最終回 当たり前を変えよう、大切なものを守ろう」は、テキストは完成しているが、画像加工、レイアウトが 2023 年度中に終了しなかったため、2024 年度に公開する。全体報告書については、執筆等の作業を進めており、2024 年度前半の公開をめざしている。</p> <p>2. 講座の実施  計画当初はすべてオンラインでの実施を想定していたが、学校からの要請があるなど対面での実施の目処がたつたため、ヨーク大学と共催したオンライン講座を除く 5 回はすべて学校や地域での対面での講座・ワークショップとして実施した。</p> <p>1) ヨーロッパほかの日本語教育関係者向けオンライン講座(2 回)  英国ヨーク大学日本語教育対話研究会からの要請を受け、ヨーロッパ各国および日本、中国、フィリピンなどの日本語教育関係者向けに、「交渉」と「システム思考」のオンライン講座を実施した。「交渉」では、脳科学や NVC(Nonviolent Communication:非暴力コミュニケーション)の知見を踏まえた「対等であるための交渉の技術」について学んだ。「システム思考」では、人間関係も含め地球上で起こるさまざまなものごとの挙動を構造的にとらえるシステム思考を体験的に学び、多様な背景をもつ人同士の対話や対等な関係性の構築についての思索を深めた。</p> <p>2) 鹿児島県日置市立飯牟礼(いいむれ)小学校でのプラスチックの授業  特任校*である飯牟礼小学校で、4 年生全生徒向けに、総合的な学習の一環としてプラスチックの授業を行った。プラスチックの語源であるギリシャ語のプラステイコスが意味するように「(熱で溶かすと)何度でも形を変えることができる」特質(可塑性)や、プラスチックのさまざまな種類とそれぞれの毒性の有無や再利用方法について学んだ、その後、細かく刻んでペレット状にしたペットボトルキャップ(熱しても毒性がほぼ発生しないポリプロピレン)を、それぞれ好きな色に調</p>

合してバングル(腕輪)をつくった。バングルづくりでは、講師がプレシヤス・プラスチックという世界的なオープンソースプロジェクトのメンバーとして自作した射出成形機(溶かして型に押し出す機械)とアルミごみでつくった金型を使い、子どもたちがペレットを溶かしてバングルの型に押し出す作業を行った。さらに、プラスチックにまつわるさまざまな事象についても学んだ。例えば、色の豊富さ(さまざまな色を容易に付着できること)が再利用を難しくしたり(色分け作業が困難になる)、人々の消費意欲を過剰に刺激し値段の安さとの相乗効果でゴミが増えてしまうこと、ごみとして捨てられるものから自分が必要な物を必要な数量だけ作れると自身の収入につながるだけでなく、海岸でプラごみ拾いをするよりもプラごみの問題の挙動を大きく変える可能性があること、など。これらはものごとを系統的にとらえる視点の共有にもなった。

\*特任校とは、主に児童・生徒数が100人以下の小規模校で、通学区以外からの入学・転入が認められる制度。過疎地域に多い。日置市の場合、全15小学校のうち過半数の8校が特任校。

### 3) 日置市での火熾(ひおき)ストーブ作りのワークショップ

日置市吹上町の公民館に鹿児島県内各地と九州各県、東京から親子が参加し、廃材のペール缶と煙突筒を使った火熾ストーブ(オンライン講座で作ったストーブの改良版)の製作に取り組んだ。製作過程では、ペール缶と煙突筒を金切りばさみで切ったり、手で曲げたりしながら、金属(ここでは鋼やステンレス)の特性とその加工方法を学んだ。ストーブ完成後は実際に火入れをし、沸かしたお湯でお茶を入れたりして楽しんだ。その後、学校で習う三つの熱の伝わり方(伝導、対流、輻射)の特徴と、それらをどのように利用すると少ない燃料(薪)で長時間火を使えるのか、そのためにストーブの構造をどのように設計するといったのかなどを考察した。

### 4) 青少年のための科学の祭典「科学のまち」日置市大会でのワークショップ実施

日置市教育委員会から誘いを受け、日置市と(公財)日本科学技術振興財団が毎年、市内の小中高校生向けに実施している「科学を体験的に学ぶ」イベントに参加。「形や広さについて考える」学問である幾何学分野で人類が発見した「一番少ない材料でつくれる一番大きい構造体」のドーム形状をテーマに、算数で習う「角度」「長さ」「円」「図形」の応用でドームがつくれることを体感的に学ぶワークショップと展示を行った。その背景には「少ない材料で大きく強いものがつくれるれば、材料の奪い合いによっておきる争いを止めることにつながる」というコンセプトがあった。ワークショップでは、子どもたちが、正八面体や正十二面体などの多面体をストローで組み立てた。組み立てる際は、子どもたちが見本を見たり触ったりしながら、気の済むまで手を動かして自由に組み立て、自分で辺や頂点がいくつあるか、どんな構造になっているかを発見していくようにした。さらに、ワークショップ会場の隣に鉄パイプで組み立てたドームを設置して自由に遊べるようにし、子どもたちが、自分がストローで組み立てた図形を大きくしていくと今登って遊んでいる大きくて強い構造体(ドーム)になること、自分にもつくれるものであることを体感してもらうようにした。

### 5) 桐朋小学校(東京都、私立)で二つの授業を実施

子どもたちとその保護者からの希望があり、5年生向けに二つの授業を実施した。

#### ● 火起こしの授業

オンライン講座でも扱った棒を板にこすりつけて火を起こす「きりもみ式」火起こしに取り組み、火が起きるには何が必要なのか、今何が足りないから火が起きないのかを探究した。火を起こすという目的に向かって、学校で習った燃焼の三要素などの知識、その場の空気の流れなどの環境要因、自分の身体の使い方、チーム内の最適な役割分担など、火が起きるのに必要なあらゆるものが結びつき、統合されるような学びが起きていた。また、火にどのくらいまで近づいても大丈夫なのかを実験しながら、憶測で過剰に怖がるのではなく、自分でじっくり観察し、考え、行動してみることの重要さへの気づきが促された。

	<p>● 子どもたちからの質問をもとにした授業</p> <p>火起こしの授業を受けた子ども達とその保護者が参加し、子どもたちからの質問に講師のテングー氏が答える形で授業が進んだ。子どもたちの「自分で水や電気やガスをまかなったり、自分で物をつくったり、環境問題に取り組んだり、なんでそういう面倒くさいことができるんですか?」「ほんとに(公共の)電気とかガスを使ってないんですか?」「山のなかで水源をどういうふうに見つけるんですか?」といった質問をきっかけに、自由について、システム的なものの考え方について、考えることを止めずに深めていく方法について等々、話が深まっていった。</p>
	<p>&lt;成果&gt;</p> <p>鹿児島県日置市および同市教育委員会との連携を深め、市内の小学校での授業が実現したほか、2024年度の中学校での連続授業の決定など、次年度に向けての足がかりを得た。また、同市主催の科学の祭典への出展や市内の公民館でのワークショップ実施等を通じて、日置市および鹿児島県内の教育関係者とのネットワークを築いた。火熾ストーブのワークショップは、日置市の広報誌と地元民放局のニュースで取り上げられ、地域住民から講師に問い合わせがあるなど、地域での認知度を高めることにつながった。</p> <p>日置市立飯牟礼小学校の授業では、バングルの製作過程で、子どもたちが自分の好奇心にもとづいて観察し、発見したことを驚きをもって素直にことばにして伝え合う様子が垣間見られた。誰かに促されるのではなく、「やりたい人がやる」「言いたい人が言う」という自主性が発揮される場となった。</p> <p>桐朋小学校の授業では、2日間にわたって子どもたちが自由に発言し、講師との活発なやりとりが展開された。授業に参加した子どもたち、保護者、教員有志の希望により、今夏鹿児島県のテングー氏のラボでの合宿が決定するなど、事業が子どもや保護者、教員の自主的な活動へと広がってきている。</p> <p>英国ヨーク大学とのオンライン講座では、ヨーロッパやアジアの各国から参加があり、「コミュニティの構成要因が多様であることへの理解が深まった」「これまでは相関関係でしかとらえられなかったものごとについて、そこに含まれる一つ一つの因果関係もとらえることができるようになり、レベルレジポイントの入れ方のヒントがたくさん得られた」「興味深い内容で一度では消化しきれない。何回かに分けてのワークショップ、研究講座として企画できないだろうか」など、自身の教育活動にいかせる内容だったとの評価を得た。</p>
	<p>&lt;課題、および、今後課題にどのように取り組むか&gt;</p> <p>2024年度の事業の中心となる鹿児島県日置市およびその周辺地域の学校で授業やワークショップを質量ともに充実させていくためには、地域での認知度と関心をさらに高めていく必要がある。関係性を築いた学校長や教職員が異動するなど、公立学校での継続的な実施をはかっていく上で学校特有の課題にも直面している。引き続き、教育行政機関、教職員、地域の教育関係者、保護者など、地域の教育に関係する幅広い層とのネットワークづくりに注力していく。</p>
<p>事業概要</p>	<p>1) ヨーロッパほかの日本語教育関係者向けオンライン講座  実施日:2023年6月30日(金)「交渉」、7月7日(金)「システム思考」  対象:・初中等・大学・成人・継承教育に関わる日本語教育関係者  参加者数:[6/30]27名 [7/7]26名  (計11カ国:イギリス、イタリア、オランダ、スイス、スウェーデン、中国、ドイツ、日本、フィリピン、フランス、ベトナム)  実施方法:オンライン  講師:テングー氏(一般社団法人「その辺のもので生きる」代表)  共催:英国ヨーク大学日本語教育対話研究会</p>

<p>2) 鹿児島県日置市立飯牟礼小学校でのプレシヤス・プラスティックの授業  実施日:2023年12月15日(金)  対象:4年生全員 参加者数:8人  会場:日置市立飯牟礼小学校  講師:テンダー氏(一般社団法人「その辺のもので生きる」代表)</p> <p>3) ワークショップ「火熾ストーブを作ろう！」  実施日:2023年12月15日(金)  対象:小学校5年生～高校3年生の児童・生徒と保護者  参加者数:16人(鹿児島、東京、長崎、福岡)  会場:鹿児島県日置市吹上町伊作地区公民館  講師:テンダー氏(一般社団法人「その辺のもので生きる」代表)</p> <p>4) 青少年のための科学の祭典「科学のまち」日置市大会でのワークショップおよび展示  実施日:2024年1月20日(土)  対象:日置市の小中高生およびその保護者  参加者数:約300人  会場:鹿児島県日置市中央公民館  講師・企画および設置:テンダー氏(一般社団法人「その辺のもので生きる」代表)  主催:「青少年のための科学の祭典」日置市大会実行委員会、(公財)日本科学技術振興財団  後援:文部科学省、全国科学館連携協議会、NHKほか</p> <p>5) 桐朋小学校での火起こしほかの授業  実施日:2024年2月1日(木)、2月2日(金)  対象・参加者数:[2/1] 5年生32名 [2/2]5年生およびその保護者43名  会場:桐朋小学校(東京都調布市)  講師:テンダー氏(一般社団法人「その辺のもので生きる」代表)</p>
---

事業名	地球講座 2023 「The LIVE」、「The CORE」								
経費	予算額	4,818,940 円		執行額	4,381,884 円		差額	437,056 円	
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由	理事会用動画制作、およびチラシデザインをスタッフが行ったため経費を抑えることができた。								
2023年度 の事業	<p>&lt;事業の目的&gt;  世界が抱える課題は複雑さを増しており、困難に直面している地域の人や関心の高い人だけで解決することができない。国や地域をこえて連帯するための「地球大の関係力」*が現代を生きる私たちに必要となっている。そこで、世界の青少年の「グローバル」に対する理解を国際から地球へと更新し、地球の目線を持って異なる他者とのつながりを体験する機会を提供する。</p> <p>*地球大の関係力  地球上の隣人(人類にかぎらない)と融通したり共有したり協力したりする関係性の力</p>								

### <2023 年度の目標>

地球上に起きている様々な現象・状況を人類の活動とその影響力にも着目しながら共有し、課題解決に向けた創意工夫などの発想や思いを交換する機会を経て、地球大の関係力に意識的になることを目標とする。

デジタル地球儀SPHERE(以降「SPHERE」)を活用し専門的で広がりのある学びを体験する。また、参加者自身の興味関心や課題意識を明確にすることで状況・環境への慮りが養い、多様な他者との関係を支えるあらたな文脈(地球の文脈)を創出する。

### <実施内容>

以下2つのプログラムをオンラインで実施した。

#### 1. 地球講座「The LIVE」(7/7\_18:00-20:30 実施)

##### 1) 日の入り中継

現地の高校や大学に通う学生レポーターが中継する、各地の日の入りの空の様子を、デジタル地球儀「SPHERE」(以下 SPHERE)に投映されるリアルタイムの雲の流れや昼と夜の境の傾きなどを参照しながら眺め、LIVE(生中継)の醍醐味を共有した。中継は、クライストチャーチ、クアラルンプール、滋賀、上海、ソウルのレポーターがそれぞれの自宅からおこなった。

##### 2) 学生レポーターによる現地レポートと講師の解説

各地の学生レポーターが、自分の地域の行事や身近に起きた気象現象についてレポート\*した。それを受けて文化人類学者である講師の竹村眞一氏が、「SPHERE」を活用しながらグローバルな視点で解説することで、各地で発生している現象がわたしたちの共有する住処「地球」を舞台にしていることを体感しながら理解した。

学生レポーターのレポートの内容:

- ・ 2023 年 1 月ニュージーランド・オークランドのサイクロン被害と、新しい年の始まりを祝うマオリの祭り「マタリキ」
- ・ 2023 年 3 月のマレーシア・ジョホール州の洪水と、2022 年 8 月の日本・滋賀県の大雨
- ・ 2022 年 8 月の韓国・ソウルの洪水と、2023 年 6 月の中国・長江中下流の豪雨

グループワークと全体シェア:

「地球の目線で考えたら、いつもと違って感じられそうなあなたの日常の出来事」についてグループ内で共有した後、全体にも報告した。3つのグループに分かれて、身近なできごとをグローバルな事象として、また現在進行形の出来事を惑星時間(46 億年)の中で起きている出来事として視点をきりかえながら、物事の捉え直しを行った。

#### 2. 地球講座「The CORE」(11/1 10:00-12:00, 12/2 10:00-12:00, 12/23 10:00-15:00 実施)

##### 1) 1 日目「地球の目線でみて考える」

アイスブレイクのあと、人間中心の世界観をいったん脇に置き、SPHERE をつかって地球の目線でものごとを捉えられるようになることを目標にすることを参加者と共有した。最後に「地球の目線で見たら、考えたら、いつもと違って感じられそうなあなたの身近な出来事」と、「自分の地球をマインドマップに書き出す」タスクを課題にして終了。

##### 2) 2 日目「グループで「未来の地球—こんな地球にしてみたい」について話しあう」

アイスブレイクのあと、ことばと文化を背景とする参加者からなるグループを結成。逐次通訳のサポートを得ながらグループの仲間と協力して未来の地球を表現するための対話を開始。グループに分かれた参加者は、「自分の地球のマインドマップ」から抽出したキーワードをもちより、イメ

	<p>ージを並べたり重ねあわせたりしながら、未来の地球をテーマに新たなアイデアを共創した。最後に途中経過を全体と共有し、他チームからのコメントを参考に内容を見直して発表方法の再検討し、グループマインドマップと発表「未来の地球 -こんな地球にしてみたい」(案)は 1 週間後を期限に提出する旨を伝えて、この日のスケジュールを終了。</p> <p>3) 3 日目「仲間と共創した「未来の地球」を発表する」</p> <p>仲間と対話しながら新たに創造した「未来の地球」の途中経過を発表。それをうけて文化人類学者の竹村眞一氏が考える地球の可能性についての話を披露。再度グループにわかれて「未来の地球」について対話し、自分と他者、ローカルとグローバル、過去と未来などスタンスをかえて世界をとらえながら地球の目線を獲得。参加者・専門家との対話を通じて未来の地球を描いた。最後に、グループが考える「未来の地球—こんな地球にしてみたい」を発表。</p>
	<p><b>&lt;成果&gt;</b></p> <p>1. 「The LIVE」</p> <p>事象に対する印象の変化や問題の背景に対する意識が高まったという声が多くよせられ、地球というフィルターをとおして見たり考えたりすることができるようになった。参加者一人ひとりが、地球という惑星に共に存在していることを実感し、地球大の関係力に意識的になった。</p> <p>2. 「The CORE」</p> <p>対話で相互に理解を深める作業に力点を置かず、それぞれの異なる感性、感覚、視点を並べて重ね、地球をテーマに未来を共に描くことで参加者間につながりを実現した。これまで「違い」とは、関係構築において乗り越えなければならない課題と見ることが多かったが、「違い」は参加者にいつもと違う思考を促し、新たなアイデアを育んだ。さらに対話を重ねることでアイデアは参加者をつなぐ文脈となった。一緒に描いた未来の地球は文脈となってグループの仲間を繋ぐ物語となった。「違い」は繋がりの実現における可能性であり希望でもあることがわかった。</p>
	<p><b>&lt;課題、および、今後課題にどのように取り組むか&gt;</b></p> <p>本プログラムは、オンラインで各地をつなぎ、「SPHERE」で今の地球を一緒にながめることで、効率的に地球に共生していることを体感させることができる。しかし、地球をテーマに対話を通じて共有する文脈を構築するには、オンライン上のやりとりは、言外のメッセージをうけとりにくく、通訳のサポートも難しい。オンラインにも利点はあるが、限られた時間の中で相手を慮ることができる関係を構築するには対面(オフライン)のほうが現段階では有効である。オンラインで地球を体感し、オフラインで対話しながら文脈を共有することができるプログラムづくりが今後の課題だ。</p>
<p>事業概要</p>	<p>対象:国内外の高校生年代の青少年</p> <p>講師:講演 竹村眞一氏(NPO 法人 ELP&lt;Earth Literacy Program&gt;代表、京都芸術大学教授)、ナビゲーター 高梨集氏(NPO 法人 ELP スタッフ)</p> <p>実施日:「The LIVE」 2023 年 7 月 7 日(金)</p> <p>「The CORE」 2023 年 11 月 11 日(土)、12 月 2 日(土)、23 日(土)</p> <p>ファンリテーター:古田小桜、ハビブウラファティマ美弥、山岸笑璃/The LIVE</p> <p>サポーター:朝田航太、古田小桜、山岸笑璃/The CORE</p> <p>レポーター:クライストチャーチの高校生 2 名、クアラルンプールの大学生 1 名、滋賀の高校生 2 名、ソウルの高校生 1 名、上海の高校生 1 名/The LIVE</p> <p>参加者数: The LIVE 53 名(日本の高校生 33 名、韓国的高校生 9 名、中国の高校生 5 名、マレーシア 6 人)、The CORE 15 名(日本の高校生 6 人、中国の高校生 3 人、韓国的高校生 3 人、マレーシアの高校生 1 人、大学生 1 人、ニュージーランドの大学生 1 人)</p> <p>実施形態:オンライン</p>



参加費:なし 実施主体:TJF 主催 企画制作:NPO 法人 ELP
--

事業名	アの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動									
経費	予算額	1,385,682 円			執行額	610,689 円			差額	774,993 円
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円	
		助成金	円		助成金	円		助成金	円	
		謝金	100,000 円		謝金	161,622 円		謝金	61,622 円	
差額発生 の事由	慶応義塾大学が実施した令和 5 年度「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)」の運営指導委員会が当初予定よりも多い回数開催されたため謝金が増額となった。									
事業概要	アの事業に関連する学会、団体等への会費等支出に加え、会員のネットワークを活かした情報収集と TJF 事業の広報を行った。また、職員の学ぶ機会として、外部セミナーへの参加や、内部の勉強会に向けての準備を実施した。									

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業

【予算額 619,000 円／実績額 406,954 円／収支差額 212,046 円】

事業名	ときめき取材記ウェブサイトの運営											
経費	予算額	309,000 円			執行額	282,173 円			差額	26,827 円		
収益	予算額	参加費	円		入金額	参加費	円		差額	参加費	円	
		助成金	円			助成金	円			助成金	円	
		謝金	0 円			謝金	27,306 円			謝金	27,306 円	
差額発生 の事由	大学からの講師依頼を引き受けたため、その報酬が収益として発生した。											
2023 年度 の事業	<b>&lt;事業の目的&gt;</b> 「ときめき取材記プロジェクト」では、国内外の大学生を中心に興味のあるテーマで、それに関連する人にインタビューし、聞き書きの手法を用いてまとめた原稿をウェブサイトで発信している。学生がトピックを通して社会を多面的に捉え、インタビュイーを通して自分と異なる意見や考えを受け止め、自分を見つめ直し、新たな考えにたどりつくこと、さらにウェブサイトに記事を掲載することで人に伝わる表現を探ることをねらいとしている。またウェブサイトに掲載されている 130 本以上の記事が有益な資料として活用され、報告書が新たな参加教師に参照され、プロジェクトの実践者が増えることもウェブサイトではねらいとしている。											
	<b>&lt;2023 年度の目標&gt;</b> ときめき取材記プロジェクトとウェブサイトの持続可能な運営ができるよう、2023 年度はこれまで培ってきたネットワークを活性化し、プロジェクト賛同者を中心に新たな団体を立ち上げられるよう道筋を付けサポートする。											
	<b>&lt;実施内容&gt;</b> ・これまで長くときめきプロジェクトに取り組んできた実践者とともに、オンライン「実践報告および情報交流会」を企画・実施することで、ネットワークの活性化を図るとともに新規で取り組む方々のサポートを行った。 ・新規取り組み者の実践事例(やさしい日本語を使った取り組み)を『ときめき取材記プロジェクト報告書』に追加し、2023 年度増補版第 2 刷として PDF を制作した。											
	<b>&lt;成果&gt;</b> すでにときめきプロジェクトに取り組んだことのある人たちの実践報告会を開くことで、改めて本プロジェクトの良さを認識してもらい機会となった。また、新たに取り組む人たちにも、取り組み経験のある人たちでネットワークができていることは大きなアピールとなった。											
<b>&lt;課題、および、今後課題にどのように取り組むか&gt;</b> これまでにときめきプロジェクトに取り組んだことのある方を中心に、新たな団体立ち上げへの同意を得られたものの、道筋が十分に立てられなかった。2024 年度は、引き続きプロジェクト実践者とともに新たな団体の立ち上げの準備を行う。												

事業概要	<p>■ 「ときめき取材記実践報告&amp;情報交流会」  対象:ときめきプロジェクトに関心のある方  実践発表者:上田安希子氏(京都教育大学)、重信三和子氏(明治学院大学)、濱田典子氏(秋田大学)、三代純平氏(武蔵野美術大学)、矢部まゆみ氏(横浜国立大学)  実施日:2024年3月23日  参加人数:7名  実施形態:オンライン  参加費:無料  主催:TJF</p> <p>■ 『〈対話〉をつくるインタビュー ときめき取材記プロジェクト報告書 2023年増補版第2版』  発行日:2024年4月1日  判型:B5判、97ページ、PDF版をウェブサイトに掲載</p>
------	---

事業名	イの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動								
経費	予算額	310,000円		執行額	124,781円		差額	185,219円	
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由									
事業概要	イの事業に関連する学会、団体等への会費等支出に加え、学会参加を含めネットワークを活かした情報収集と TJF 事業の広報を行った。								

ウ. 多様な言語や文化の背景をもつ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業  
【予算額 9,847,058 円／実績額 8,826,865 円／収支差額 1,020,193 円】

事業名	多言語・多文化パフォーマンス合宿 ひろしま PCAMP										
経費	予算額	6,500,000 円			執行額	7,679,798 円			差額	△1,179,798 円	
収益	予算額	参加費	150,000 円		入金額	参加費	70,000 円		差額	参加費	△80,000 円
		助成金	0 円			助成金	0 円			助成金	0 円
		寄付金	0 円			寄付金	30,000 円			寄付金	30,000 円
差額発生 の事由	<p>1. 経費について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひろしま PCAMP で急遽大型ビデオカメラのレンタルが必要となったため、賃借料が増えた。</li> <li>・当初予算では実施が確定していなかった「とやま PCAMP2024」が下半期に入って実施の見通しが立ってきたため、その事前準備のための出張、広報に向けてのイベント(それぞれ留学生、市民、アーティストを対象とする三つのワークショップ)を 2023 年度内に実施したことを受け、旅費・謝金が増額となった。</li> </ul> <p>2. 収益について</p> <p>ひろしま PCAMP の参加者が定員に満たなかったため、収益減となった。一方で、呉ロータリークラブの寄付金を得た。</p>										
2023 年度 の事業	<p>&lt;事業の目的&gt;</p> <p>多文化化が進む日本国内において、外国につながる子どものなかでも特に高校生の年代の人が受けられるサポートは小学校、中学校と比べると多くない。また、外国につながる人に限らず、高校生年代では学習面や進路の面、多様な同世代との交流の面において、様々な困難に直面し、孤立感を深めている場合がある。PCAMP では外国につながる高校生年代をはじめ、表現活動をとおして参加者自身によるアイデンティティの探求や他者と対話する機会、多様なバックグラウンドを持つ同世代が協力・協働・共創する活動を体験する機会を提供する。これにより、これからの多文化社会を生きる高校生年代の人の自己肯定感を高め、相互理解を深め、地域での仲間を作り、多文化共生の社会づくりに参画していく契機とする。</p> <p>&lt;2023 年度の目標&gt;</p> <p>ひろしま PCAMP2022・2023 で得た経験、知見を、広島県での継続実施と広島県以外の地域での展開へと進める道筋をつける。そのために必要な協力団体、協力者との信頼関係を構築し、協力体制が整うように努める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実行委員会による運営体制を確立し、2022 年は安芸高田市、2023 年は呉市、2024 年は福山市と広島各地を巡回開催できる布石とする。</li> <li>2. 実行委員会及びその事務局と協力し、市民活動支援、地域多文化共生ネットワーク支援、芸術による地域振興などを対象とする助成金や協賛金の獲得に努める。</li> <li>3. 2022 年度のプログラムのブラッシュアップを図りつつ、参加経験者からサポーターを募り、現地の人にファシリテーターを依頼するなどしながら、今後のプログラムを支えてくれる人材の育成をめざす。</li> </ol>										

4. 5月にTJFが「パフォーマンス合宿公開報告会及び体験ワークショップ」を「ひろしまPCAMP2023」と同じ会場で開催することも含め、本番開催についても十分に周知できるよう地域の協力を得られるよう務める。

#### <実施内容>

1. ひろしまPCAMP実行委員会の立上げ(2023年度稼働に向けて、前年度から準備)

ひろしまPCAMP2022の共催団体、協力団体の代表を中心に、ひろしまPCAMP2023の共催団体担当者が加わり、2022年12月1日付で実行委員会を立ち上げ、構成団体の一つに事務局を委託し、5月のイベント及び8月のPCAMPの企画・準備と本番運営、及び実施後の成果検証に関わってもらった。参加者対応、ファシリテーター派遣、芸術プログラムの企画会合や実行委員会合の取りまとめはTJFが担った。

2. 「パフォーマンス合宿」公開報告会及び体験ワークショップの開催(2023年5月28日)

(1)公開報告会の開催に向け、成果と課題を検証するために、PCAMPを立ち上げてから5年間の歩みを振り返るとともに、前年度に実施した過去の参加者やその保護者、サポーター経験者、ファシリテーターなど計26名にインタビューをもとに、記録映像を作成した。報告会本番では担当者による口頭報告、インタビュー映像やPCAMP映像の上映、現地協力団体の代表者、現地ファシリテーターによる登壇トークを行った。

(2)体験ワークショップでは、開催地の小学生から高校生年代、広島県及び近隣地域の多文化活動従事者、PCAMPの協力者、芸術を用いた表現活動や多文化交流に関心を持つ全国の研究者などが参加し、ひろしまPCAMPに取り入れているシアターゲームや創作活動を体験してもらった。

3. 「PCAMP5年の歩み」オンライン報告会&交流会の実施(2023年6月25日)

5月28日(日)にリアル会場で行った報告会の派生プログラム。5月の報告会には広島県及び周辺地域のみならず、北海道、東京、静岡、大阪、島根など遠くからの参加もあり、PCAMPへの関心の高さが伺えたことから、当日参加できなかった方々と情報共有、情報交換する場をオンラインで設定した。報告会には13名、交流会には8名の参加があった。公開報告会の記録動画を上映し、PCAMPの趣旨や挑戦、課題など運営側の視点からの報告に加え、PCAMPに参加した高校生やその保護者、ファシリテーターなど20名以上の映像インタビューをまとめた記録動画も上映。オンライン参加者からは「PCAMPの歴史～コロナ禍での苦労、新たな挑戦など～について知ることができて興味深かった」「(今回のように)振り返ってそれらを俯瞰するような機会も重要」といった感想があった。

4. 【多文化×芸術】ティーチングアーティスト(TA)研修の実施(2023年7月26日、27日)

TAとはTeaching Artist(ティーチングアーティスト)の略で、一般的に教育活動に携わるプロのアーティストを指す。PCAMPの継続と発展には「芸術をツールに用いた多文化交流、多文化共生へのチャレンジ」を意味するPCAMPのコンセプト「多文化×芸術」を深く理解し、実践する知見とスキルを持つファシリテーターの育成が不可欠と考える。そのような人材の確保をめざし、まず、ひろしまPCAMPのサブファシリテーターのための研修を実施した。PCAMPのメイン・ファシリテーターであり、ニューヨーク在住の舞台俳優、ティーチングアーティストの森永明日夏氏が講師を務めた。研修プログラムは森永さんとPCAMPのメイン・ファシリテーターの柏木俊彦氏(演出家、舞台俳優)の2名で作成した。サブ・ファシリテーターと広島在住の若手アーティスト計5名が受講。2日間にわたって、多文化TAの定義やマインドセット、WSのプログラム作り方に関するレクチャー、PCAMPのメインアクティビティである「I am from」を深めるための演習、受講者によるミニアクティビティの考案・試し・ディスカッションを行った。

TA 研修後の企画・運営チームの振返りでは、「熟達したファシリテーターになるには多くの実践と学びの場が必要であるが、特に地方都市ではその両方が不足している」という認識で一致した。そこで、PCAMPのメイン・ファシリテーターの3名が発起人、サブ・ファシリテーターをはじめTJF初のTA研修に参加した5人がメンバー、TJFのPCAMP担当が事務局を務める「TA自主勉強会」が立ち上がった。今後新しくPCAMPの2地域目、3地域目のファシリテーターもメンバーに加わってもらい、「多文化×芸術」という共通言語を持った「ゆるやかな多地域間学びの共同体」を構築していくという構想のもと、2023年10月から隔月でTA勉強会を開いている。

#### 5. ひろしま PCAMP2023 の実施(2023年8月3日～6日)

広島在住の高校生等14名が初参加し、ひろしま PCAMP2022参加した高校生3名がサポーターとして参加した。また、PCAMP2019(東京)に広島から参加しPCAMPの広島開催のきっかけを作ってくれた大学生1名(2019年当時は高校生)が前半日程のサポーターを務めた。18名の参加者がつながりを持つ国・地域は韓国、日本、ネパール、フィリピン、ブラジルであった。初日はアイスブレイク、ウォーミングアップを中心に行って参加者の心身をほぐし、2日目からグループ単位で交流を深めながら作品をつくり、3日目は作品の仕上げ、リハーサルを行い、4日目は参加者の家族、地域の行政関係者や市民、計約100名の観覧者を前にパフォーマンス発表会を開催した。

#### 6. イミグレーション・ミュージアム・東京(IMM 東京)に出展(2023年10月5日～11月7日)

ひろしま PCAMP2023 の発表会のために参加者がファシリテーターとスタッフのサポートのもと制作した舞台美術(1m×8m×4本の不織布アート)を、PCAMP終了後、海外にルーツを持つ参加者が代表を務めるグループ作品として、「チャレンジ！存在を世界に伝えよう！私たちが生きる爪痕を残して！」というタイトルで、IMM東京(国内に在留する海外ルーツの人びとの日本での日常生活に焦点をあてたアートプロジェクト)の公募展に出展した。作品は東京ビエンナーレのリンケージ展として東京大丸有エリアの会場で約1カ月展示されたあと、IMM東京のウェブサイトアーカイブ(画像を収録)されている。

#### 7. 教員向け「演劇教育ワークショップ」の実施(2023年12月23日)

TJFにとって初の教員向け「演劇教育ワークショップ」を福山暁の星女子中学校・高等学校(広島県福山市)で実施した。福山暁の星女子中学校・高等学校には外国につながる生徒も在籍していることと、当校が「学び方改革」で探求している方向性とPCAMPのコンセプトが一致する点が多いことから関心が寄せられ、共同企画につながった。ひろしま PCAMP2024 を福山市で開催する方向性を模索する中、教頭先生をはじめ教員17名が参加した。

ワークショップは1)教員間の交流を深める、2)協働できるチームビルディング、3)教員としての「引き出し」を増やす、という3点をゴールに、体験とレクチャー、対話からプログラムを構成した。研修講師は森永明日夏さんが務めた。参加した教師たちからは「自分が解放されていくのが分かった」「もっと生徒を信じ、褒め、自由に考えてもらうことが大事だと分かった」「同僚たちがそれぞれ大切にしていることや新しい一面を知ることができた」「体験した演劇ワークを部活やクラスで試してみたい」「PCAMPを生徒に勧めたい」などの感想が聞かれた。

#### 8. 「ひろしま PCAMP2023」参加者アフターインタビュー(2024年2～3月)

ひろしま PCAMP2023 の実行委員会事務局が中心となって、PCAMP終了後半年が経って、改めて参加者の変化や成長を検証するためのアフターインタビューを行い、記録映像を制作した。実行委員はインタビュー会場などの手配に協力し、TJFは参加者とその保護者への許諾取り付け、記録映像のデータ校正、ウェブ掲載を分担した。なお、インタビュー及び映像制作の諸費用は事務局が管理・執行を一任された一般財団法人かめのり財団の助成金を充当してもらった。

	<p>9. 「多文化×芸術」ワークショップ in 富山の実施(2024年2月9日～11日)</p> <p>広島県での実践に共感した公益財団法人富山市民文化事業団から、2024年度に富山県でもPCAMPが開催できないか検討したいとの申し出を受け、「とやまPCAMP2024」のプレイベントとして、それぞれ留学生、市民、アーティストを対象とする連続ワークショップを実施した。ワークショップ(WS1～3)の概要は以下の通り。</p> <p><b>【WS1】</b>対象:留学生21名と引率教員2名、内容:交流に重きをおいたシアターゲーム、身体で形をつくるアクティビティなど。</p> <p><b>【WS2】</b>対象:県内及び周辺地域の市民14名、内容:とやまPCAMP2024(8月開催予定)のプログラムの一部を体験。</p> <p><b>【WS3】</b>対象:舞台芸術実演者など12名、内容:ファシリテーターになるための研修プログラム、富山の多文化共生についてのレクチャーを実施。</p>
	<p><b>&lt;成果&gt;</b></p> <p>当初の事業計画にあった5月のプレイベント、8月のPCAMP、そして4つの事業目標をすべて達成することができた。また、次年度は福山市で巡回開催するという布石も実現へとつながった。そして、ひろしまPCAMPが3年目を迎える2024年度に、2地域目として「とやまPCAMP」の初開催が決まった。広島でPCAMPのノウハウを蓄積し、3年間を目途に「広島モデル」として他地域にも広げるといふ2022年当初の構想通りに進んでいる。</p> <p>また、ひろしまPCAMP2023からIMM東京に出展できたこと、参加者が呉市の国際フェスタでPCAMPについてステージ発表したこと、開催地呉市の協力団体がPCAMP運営での知見を活かし日頃の多文化交流活動においてはじめて演劇ワークショップを企画・実施したこと、PCAMPのサブ・ファシリテーター派遣、事務局を受託した無色透明はTA研修とPCAMPでの経験を生かし、演劇教育プログラムを導入したいという広島県内の高校の相談に乗っていることなども、PCAMPから派生した効果と考える。</p> <p>そして、TA研修、TA勉強会、教員研修、市民体験ワークショップが大好評を得たことは、PCAMPが「多文化×芸術」をコンセプトに、今後ダイナミックに展開できる可能性を示している。</p> <p>費用面での成果として、ひろしま実行委員会メンバーの働きかけにより、施設の利用料減免、呉ロータリークラブの協賛金の獲得、公益財団法人かめのり財団より50万円の助成金を獲得した(実行委員会事務局が管理・執行)。</p>
	<p><b>&lt;課題、および、今後課題にどのように取り組むか&gt;</b></p> <p>ひろしまPCAMP2023は、2022年と比較して応募者が少なかった。特に海外ルーツの応募者が減った。実行委員会のメンバーと要因分析を行った結果、2022年はコロナ禍で人との交流が不足していたことが応募者数を押し上げたが、コロナ禍が落ち着きを見せ、さまざまな対面活動(スポーツ大会や行事、礼拝活動など)が一気に再開していることや、親の母国帰省が可能となり同伴帰国する中高生も多いことなどが、応募者減の要因の一つとして考えられるのではないかと結論に至った。こうした状況への対策としては、広報に協力してくれる団体、協力者を増やすこと、情報を届けるルートや方法を増やすこと、応募のハードルを下げる広報を行うことなどで講じていく。</p>
<p>事業概要</p>	<p>対象:広島県に在住または通学している中高生及び中高生年齢(15～19歳の方)</p> <p>期間:2023年8月3日(木)～6日(日)</p> <p>場所:呉市広まちづくりセンター(活動会場)、グリーンヒル郷原(宿泊所)</p> <p>参加者:広島県在住中高生14名</p>

<p>サポーター:広島県在住高校生3名、大学生1名          ファシリテーター:江島慶俊(俳優・劇作家)、坂田光平(俳優・舞台美術)、田畑真希(振付家・ダンサー)、森永明日夏(俳優・ティーチングアーティスト)          プログラム企画:柏木俊彦(演出家・俳優)、ファシリテーター全員          主催:公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)          共催:呉市国際交流協会(KIEA)          後援:呉市、広島県教育委員会          協力:安芸高田市国際交流協会、こどものひろばヤッチャル(東広島市)、東広島市教育文化振興事業団、ひまわり21(呉市)、びんご日本語多言語サポートセンターびるど(福山市)、ワールド・キッズ・ネットワーク(呉市)、一般社団法人舞台芸術制作室無色透明(広島市)          協賛:呉ロータリークラブ          現地運営:ひろしまPCAMP実行委員会</p>
---

事業名	新たな表現を探るオンライン交流プログラム みんなで Collaboard!								
経費	予算額	2,955,000 円		執行額	1,088,321 円		差額	1,866,679 円	
収益	予算額	参加費	0 円	入金額	参加費	0 円	差額	参加費	0 円
		助成金	500,000 円		助成金	500,000 円		助成金	0 円
			円			円			円
差額発生の事由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部協力者をファシリテーター1名に変更したため、減額。企画段階で当初予定していた写真の専門家に技法を教わるのではなく、表現を専門とする舞台俳優兼ティーチングアーティストと伴走し「伝える」ことを重視したプログラムとした。</li> <li>・プログラム最終日に行う発表会の形式を計画より簡素化し、配信支援委託をしなかったため、減額となった。</li> <li>・本事業はパイロットプログラムとしての実施のため、広報用の動画の制作を見送り、報告用動画を内製化したため、執行額の減少となった。</li> </ul>								
2023年度の事業	<p><b>&lt;事業の目的&gt;</b>          現在オンライン上での活動は、オフラインの代替ではなく、もう一つの重要な世界として存在している。また、対面でのコミュニケーションが苦手な中高生も一定数おり、オンラインでの交流ならハードルが低く参加しやすいと感じる人たちもいる。本事業では、海外の日本語学習者と国内の多様な背景をもつ高校生を対象に、協働で作品を作ることを通じて、互いを知り、自己を表現し、対話をし、考えの違いを調整し、共通の目標を達成する経験をしてもらう。また、オンライン環境の交流をより深める方法を探るとともに、心理的安全性の高い場をつくれるよう配慮し、高校生が安心して参加できるようにする。</p> <p><b>&lt;2023年度の目標&gt;</b>          多様な背景を持つ高校生たちが、それぞれが撮った写真を媒体として交流する場をつくることで、多様性や文化の違いに触れ、相手の文化だけではなく、自分の文化にも気付く機会をつくる。写真という言葉以外の媒体を通じて、より自由に自分自身を表現すると同時に、それぞれが写真に表現したことを持ち寄ることで、あらたな表現を模索し作品を創造する。</p>								



写真を用いて交流するという当初の計画から、コラボレーションしてオンライン上の「写真ボード」を制作するという内容を明確にした事業名に変更した。

### <実施内容>

オンラインで写真を通じた交流を行う本事業は、自己表現、伝えること、理解しようとすることに重点を置いた。使用言語は原則日本語としたが、中国と韓国の参加者の日本語レベルを考慮し、重要な部分は適宜通訳して対応した。

#### ●事前交流(2023年12月ー2024年1月)

目的: 予めどんな参加者がいるかを知り、交流へのモチベーションをあげるとともに、安心して参加できる場を形成するため。

#### 活動内容

1) 自己紹介→他の人の自己紹介にコメントを入れて更に掘り下げて相手を知る

2) 事前課題(指定したテーマに沿った写真の提出、テーマ「未来」の写真コラージュを提出)→他の人の写真にコメントしあう

#### ●4日間の交流(2024年1月27日、28日、2月3日、4日)

参加者がチームで対話する時間や作品制作時間を確保しつつ、参加者に負担のない日程の4日間で実施した。

日本、中国、韓国からのメンバーで構成される少人数のチームで、参加者それぞれが同じテーマの写真を持ち寄り、写真を見せながら紹介し、撮った理由や思いなどを言葉や詩で伝え、交流する。写真に込められた思いを大切にしながら協働し、作品を制作する。作品制作はオンライン上のデザインアプリ(Canva)を使用し、言葉でのコミュニケーションが苦手でも創作作業に関われるようにした。

#### ○初日: ウォーミングアップ、プログラム説明、事前課題の写真のシェア、詩の制作

初めて会う参加者同士が自然と知り合えるように、ゲーム感覚で自己紹介した。名前、好きなもの、苦手な食べ物、住んでいるところなどを単語で言い合い、好きなもの(アイドルやアニメなど)が同じ人が見つかると喜ぶシーンが見られた。事前課題で提出していた4枚の写真について、個人で詩を書いた。

#### ○2日目: ウォーミングアップ、詩を2人一組で共有、Canvaの練習、作品作りの説明、チームに分かれて作品づくりのための話し合い

2人一組で書いた詩を共有した際には、日本のメンバーと中韓のメンバーがペアになるようにし、言葉が通じないことを楽しんでもらう時間とした。通訳がいないとわかると、「何とか伝えよう」として、自主的に通訳アプリを使ったり、チャットを使ったりしていた。スムーズな会話でなくても、自分たちの力で理解しあうことができ、いきいきとした表情の参加者が多かった。

#### ○3日目: ウォーミングアップ、チームに分かれて話し合い、Canvaを使った作品づくり、全体で中間発表

他のチームがどんな作品なのか、どんな進捗状況なのかを知り、更にブラッシュアップする機会にした。他のチームがやっていることを見て、自分たちもやりたいと刺激されることもあった。

#### ○4日目: ウォーミングアップ、発表会のリハーサル、チームごとに発表の練習、発表会、振り返り保護者、学校関係者、推薦教師、オンライン交流に興味のある方々など、30名前後の見学者を得て発表会を行った。

	<p><b>&lt;成果&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉以外の表現 話し合いの時は反応が小さい参加者も、写真を使った創作作業が始まると、活発に動き、創作画面上では自由に表現してチームメンバーと一つの作品をつくることができた。日本語のレベルや、コミュニケーション能力にかかわらず、協働作業ができる形となった。</li> <li>・相手の思いを大切に チームの作品は、提出された1枚の写真に、チームメンバーがスタンプやペンで装飾して創作した。写真を提出した人の意思を尊重するため、どんな思いの写真なのか聞き、確認し、その人が表現したいことがより伝わるように装飾した。その人の思いを感じながら、各々の創造性を発揮してもらうことができた。</li> <li>・伝えようとする力 多様なメンバーでのチーム構成で、チーム間でのコミュニケーションには言葉の壁があり、自分たちで解決しなければならなかったため、「どうにか伝えたい」「相手の意見を聞きたい」と一生懸命に話す姿が多く見られた。参加者の振り返りアンケートからも、「どうしたら伝わるか考える力がついた」との声が多く聞かれた。それは、コミュニケーションに必要な「伝える内容を考えること」、「相手に分かりやすいように伝えること」、「理解してもらっているか待つこと」「相手の意見を聞いて受け止めること」であり、忍耐力や傾聴力を鍛える機会となったと感じる。</li> <li>・本事業終了後、担当者間で事業全体を振り返り検証している。</li> <li>・公益財団法人三菱UFJ国際財団から50万円の助成を受け実施した。事業の目的を理解していただき実施することができたことも、成果の一つと考える。</li> </ul> <p><b>&lt;課題、および、今後課題にどのように取り組むか&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・開始前の事前会合から何度も日程を確認しているにも関わらず、直前に欠席する参加者がおり、チーム作業が思うように進まないことがあった。オンライン開催で参加費も無料であることから、容易に欠席できてしまう状況が、大きな課題であると考え。開催方式をハイブリッドにすることや、欠席せずに参加した場合に次のステージに進めるなど、策を講じたい。</li> <li>・プログラム終了後、参加者に記入してもらった振り返りでは、言葉のみで回答する形式だったため、写真や絵など、言葉に頼らず表現する方法を取り入れたら、参加者の思いをよりリアルに聞き取ることができたかもしれない。次回開催時には振り返りにおいても「表現する」「伝える」に重点を置いて改善したい。</li> </ul>
事業概要	<p>対象：国内外の多様な中高生年代の人  実施時期：2024年1月27日、28日、2月3日、4日 計4日間  参加者：多様な中高生16人（日本在住6名、韓国在住5名、中国在住5名）  ファンリレーター：森永明日夏氏（舞台俳優・ティーチングアーティスト）  その他の協力者：交流サポーター5人（TJF交流プログラム経験者の高校生、大学生）  プログラムの公開の有無：有り（オンライン発表会）  オンライン発表会の観覧：30人  実施形態：オンライン  実施主体：TJF主催  助成：公益財団法人三菱UFJ国際財団</p>

事業名	ウの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動								
経費	予算額	392,058 円		執行額	58,746 円		差額	333,312 円	
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由									
事業概要	ウの事業に関連する外部ネットワークとのつながりを活かした情報収集と TJJF 事業の広報を行った。								

エ. 広報事業

【予算額 7,705,995 円／実績額 3,885,123 円／収支差額 3,820,872 円】

事業名	財団の広報								
経費	予算額	6,066,400 円		執行額	2,139,795 円		差額	3,926,605 円	
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部編集者に委託する予定だったが、内部で編集を行った。</li> <li>CoReCa の印刷・発送を次年度に繰り越した。</li> </ul>								
2023 年度 の事業	<b>&lt;事業の目的&gt;</b>								
	TJF の活動趣旨と各事業について、関心をもつ多くの人たちに情報が届くよう発信活動を行う。								
	<b>&lt;2023 年度の目標&gt;</b> 同上								
	<b>&lt;実施内容&gt;</b>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>事業報告書『CoReCa2022-2023』の制作作業を行った。</li> <li>ウェブサイト、メールマガジン「わやわや」、Facebook、インスタグラム等で、TJF の活動趣旨と各事業について定期的に情報発信を行った。</li> <li>今後のウェブサイトの利便性の向上に向けて、業者をまじえて検討を行った。</li> <li>ウェブ解析ツールを移行し、TJF のニーズにあわせたインターフェースの設定作業を行った。</li> </ul>									
<b>&lt;成果&gt;</b>									
<ul style="list-style-type: none"> <li>事業報告書『CoReCa2022-2023』については、2024 年 5 月に 5,000 部を発行し、国内外の支援者・協力者・参加者および教育関係者に、広く TJF の活動趣旨および事業内容の情報を届ける予定である。</li> <li>ウェブサイト、メールマガジン「わやわや」、各種 SNS を通じ、TJF の活動趣旨と各事業について情報発信を行った。</li> <li>2024 年度に向けて、ウェブサイトの改修作業の方向性が固まり、さらなる利便性の向上が実現する見込みがたった。</li> <li>ウェブ解析ツールのインターフェースを設計し、TJF が必要とする解析ツールが容易に収集できるようになった。</li> </ul>									
<b>&lt;課題、および、今後課題にどのように取り組むか&gt;</b>									
事業報告書『CoReCa』については、昨年定めた TJF のビジョン・ミッションを反映させた事業構想に注力するため一旦休刊とする。 同時に、社会および情報発信媒体の変化の動向を見極めながら、今後の広報のあり方を探っていく。									
事業概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>『CoReCa2022-2023』制作 判型:A4 変型、46 ページ、発行部数:5,000 部、発行予定日:2024 年 5 月 17 日)</li> </ul>								

	<ul style="list-style-type: none"> <li>メールマガジン「わやわや」の配信</li> </ul> <p>購読者数:2266名(2024年3月時点)          配信数:定期号(毎月第3水曜日)12本、臨時号18本配信</p>
--	---

事業名	デジタル媒体を使った広報のサポート								
経費	予算額	1,289,595 円		執行額	1,723,900 円		差額	△434,305 円	
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由	・ウェブサイト保守・管理業務において、管理するコンテンツが増えたことにより経費増となった。								
2023年度 の事業	<b>&lt;実施内容&gt;</b> ・デジタル媒体を使用した情報発信が円滑に行われるよう、IT 器機管理や各種アプリケーションの利用など環境整備やテクニカル面でのサポートを行った。								

事業名	エの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動								
経費	予算額	350,000 円		執行額	21,428 円		差額	328,572 円	
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由									
事業概要	エの事業に関連する外部ネットワークとのつながりを活かした情報収集と 事業の広報を行った。								

オ. 助成事業

【予算額 475,318 円／実績額 0 円／収支差額 475,318 円】

事業名	公募助成金プログラム								
経費	予算額	475,318 円		執行額	0 円		差額	475,318 円	
収益	予算額	参加費	円	入金額	参加費	円	差額	参加費	円
		助成金	円		助成金	円		助成金	円
			円			円			円
差額発生 の事由	内閣府からの承認待ちを受け、2023 年度中の助成事業の実施を見送ることとなった。								
2023 年度 の事業	<p>&lt;事業の目的&gt; TJF がこれまでの実績と経年の活動により得た団体間、人的ネットワークを生かした連携を TJF の自主事業ではなく、他団体等の自立発展性を促進することに役立てる。TJF の今後の事業運営のための新規事業開拓や新たなパートナーの開拓も視野に入れ、公募による助成金プログラムを設置する。</p>								
	<p>&lt;2023 年度の目標&gt; 初年度は、今後の事業展開のための準備期間として助成事業が新設されたことを周知し、採択可能性のある団体等の活動を調査すると同時に、募集を行う。年度途中での募集のため、採択する団体数は3件程度とする。</p>								
事業概要	上記の目標を立てていたが、内閣府への申請手続きに時間を要し、事業変更の承認を得られたのは 2023 年 11 月であった。よって、2023 年度中の公募については見送ることとし、2024 年度中に改めて公募が始められるよう取り組む。								